

現在 1952年6月〜1955年9月

◆復刻版概要◆

- 解説 鳥羽耕史(早稲田大学文学学術院教授)
- 回想 小田三月(作家)
- 巻数 全2巻・別冊1
- 体裁 B5判・上製・総498頁
- 別冊 解説・解題・回想・総目次・索引
- 揃定価 本体30,000円+税
- ISBN978-4-908147-27-2
- 推薦 池田龍雄(画家)
- 成田龍一(日本女子大学人間社会学部教授)

〔主要執筆者一覧〕

安部 公房	小林 勝	野田 真吉
安部 真知	小山 俊一	野原 一夫
安東 次男	島尾 敏雄	花崎 泉平
飯島 耕一	島原 健三	花田 英三
池田 龍雄	庄司 直人	林 光
石崎津義男	庄野 潤三	林 富士馬
泉 三太郎	関根 弘	針生 一郎
宇留野元一	竹内 実	富士 正晴
江島 寛	竹内 康宏	牧 羊子
岡見 祐輔	伊達 得夫	榎木 恭介
小田 三月	玉井 五一	増永 香
開高 健	勅使河原宏	真鍋 吳夫
栗田 勇	戸石 泰一	山本 太郎
高良留美子	中島 力	吉岡 達一
小島 輝正	那珂 太郎	渡部 雄吉

ルポルタージュ 日本の証言

- 復刻版概要
- 解説 鳥羽耕史(早稲田大学文学学術院教授)
 - 冊数 全9冊+別冊1+付録1
 - 体裁 新書判・並製
 - 別冊 別冊及び付録はB6判・並製
 - 別冊 解説・解題と会員のルポルタージュ「ゴミのゆくえ」(遠藤周作他2名)と「アメリカ航路」(岡見裕輔)を収録
 - 付録 「内灘」その砂丘にえがく新しい歴史」
 - 総頁数 約1,000頁
 - 定価 本体45,000円+税
 - ISBN978-4-908943-80-7
 - 推薦 小田三月・鈴木勝雄



オリジナルケース

- ◎収録内容
- 1 原子力 榎木恭介
 - 2 にしん―凶漁地帯を行く 安東次男
 - 3 米作地帯―土の中に眠つてはいない 斎藤芳郎
 - 4 夜学生 戸石泰一
 - 5 刑務所 小林勝
 - 6 鉄―オモチヤの世界 関根弘
 - 7 せんぶりせんじが笑った! 上野英信
 - 8 村の選挙 杉浦明平
 - 補 ルポルタージュとは何か 安部公房・他

安部公房や関根弘らが率いた前衛的文芸雑誌から戦後文化を再考する

一九五二年四月、本土では占領が解除されるが時代は「揺れ戻し」の中にあつた皇居前広場で、早大構内で、新宿駅前で反戦平和を叫ぶ声は高まり、警察の弾圧もまた激しさを増すなかで約六〇名の若い作家や画家や写真家が結集し、『現在』は創刊された誌面を飾ったのは、創作・詩作品・評論・ルポルタージュなどである。彼らは研究会を組織し、討論を重ね、時代に対処する様々な方法を模索した先達の声に、今ふたたび、耳をすましたい。

現在

復刻版 全2巻+別冊1

1952年▶55年
現在の会編



- 解説 鳥羽耕史
- 回想 小田三月
- 揃定価 本体30,000円+税
- ISBN978-4-908147-27-2
- 推薦 池田龍雄・成田龍一
- 2015年7月刊行

三人社

株式会社
三人社
〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘
電話 075-762-0368
FAX 075-762-0369
振替 00960-1-282564

※図書館様・書店様へ
小社は少数出版のため取次口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。

●表示はすべて税別

『現在』の時代

池田龍雄(画家)

1950年代は戦争の傷跡がまだ色濃く残っていた。が、それまでさんざん圧迫され逼塞状態にあった芸術が一斉に息を吹き返し、それに、戦中に育ったわたしたちの若い力が加わって大いに活気づいてきた頃である。

しかし、50年6月、朝鮮半島で突然火の手が上がるとともに、いわゆる東西冷戦は一挙に熱戦の様相を帯び、共産党は露骨に弾圧され、赤旗は発行停止、幹部は地下に潜入、地上ではレッドパージが始まったのだ。そして、基地反対闘争、反原爆反戦平和の運動が起こっていた。当時、小説家、詩人、評論家、映画・演劇人、画家たちの多くが前衛党に所属していたのだが、そのような時代状況を背景に「現在の会」は発足したのである。

48年の秋以来、「世紀の会」などで活動を共にしてきた安部公房や関根弘らが、その「現在の会」の中心部にいた関係で、画家ながらわたしは、誘われるまま時々オブザーバーとして会合に出席していたが、会が、ルポルタージュ叢書『日本の証言』なる小冊子を出すことになってから、会との繋がりは更に密接になり、結局、全九冊の内三冊、表紙や挿し絵で関わるようになったのである。開高健、島尾敏雄、安東次男、真鍋呉夫、針生一郎、柁木恭介、小林勝らと、皆そこで親しくなった。

だから昨年『日本の証言』が復刻され、続いて今年『現在』が60年ぶりに陽の目をみるようになったのは大いに嬉しい。二度と来ない、来させてはならない戦後の空気を、若い世代にこの雑誌を通して感じ取って貰いたいのである。是非、是非……

内容見本



座談会 危機と文学 (続)

安部公房・泉三太郎・江口美奈子
戸石泰一・那珂太郎・山本太郎

危機意識について

安部 あんまり危機感々々って云うの問題だと思ふ。一つの社会現象というものはそれ自体としては意味がないんでね。歴史の流れだからね。それを危機と感ずるか希望と受取るか、だ。始めから危機感で決めてかかることがおかしんじゃないか。

戸石 そういつつもつたんじや話が

泉 人間としての自由の危機だ、と云えるだろうね。

安部 その人間としての、というのとね、それが問題だ。今まで身論というものを作つて来たのは、ヒューマニズムで自分を守る者ばかりだ。そういう人間だけが人間としてという風な云い方ができるんだよ。ところが、そんな人間なんてを云えない連中、そういうところを今、抵抗はどんどん広がって来ていて、破防法なんかはそういう抵抗の拡がりに対する支離滅裂の狼狽ぶりを示すものだと思うんだ。ヒューマニズムの抵抗なんて線はこわれてるよ人間としての自由の危機なんてのは抽象的な解釈だと思ふ。見方によつてはだ、日本が、今、こんな完全な半殖民地状態におかれて、この状態にどんな態度をとるかによつて文学にしても、ここで本当に近代的なものに向ふという、さういう明るい見方だつてとれる思ふんだ。

那珂 だけど、その明るい見方、というか、正しいもの芽を押しつぶさうとしてる、さういう抑圧があるだろう。それを危機と云つてるんだと思ふ。

安部 そのとおりだね。危機と危機感を区別すればいいのかもしれないね。

山本 安部の云うことはよくわかる

推薦のことは

ルポルタージュ「最前衛」のうちとそと

成田龍一(日本女子大学人間社会学部教授)

1952年6月。本土の占領終了後、時間をおかずして創刊された『現在』は、(いま)に正面から向き合う誌名を選択するとともに、緊張感に満ちた誌面を提供している。創刊号の「編集後記」は、「憤り、訴えたいことのあまりにも多い今日此頃」と述べ、「めいめいそれらに耐えて考え行おう」と決意を語る一方、「集つて話し合うこと」「めいめいの仕事を雑誌に集めること」をいう。集団の力を信じ、研究会が組織され、その成果を『現在』に反映していくのである。

冷戦体制のもとで、社会的であることと実存的であること、政治的であることと芸術的であることを議論し、方法の模索とともに、どのような表現をするかが議論されていく。冷戦体制がつきつける現在を、いかに把握し返すか。このことが、創作や詩作品として、座談会として誌面に投影される。

とともに、『現在』は、「レポート」や「ルポルタージュの地図」として、ルポルタージュの領域にも力を割く。周知のように、『現在の核をなす「現在の会」は、1955年から「ルポルタージュ 日本証言」全8冊を刊行する。このとき、ルポルタージュという方法の検討、その多様な可能性の模索もまた、『現在』のなかでなされていることがうかがえる。第14号(1955年9月)の「後記」で、小田三月は、「日本の証言」第二期が進行していることを告げ、「真のルポルタージュを確立しよう」と、大変な努力をしている」と述べている。小田が自負するように、『現在』に集う人々は、ルポルタージュの分野を意識的に切り開いていく「最前衛」にあった。ルポルタージュの周辺を知り得る意味でも、興味尽きない雑誌である。

(4)

ルポルタージュの地図 1

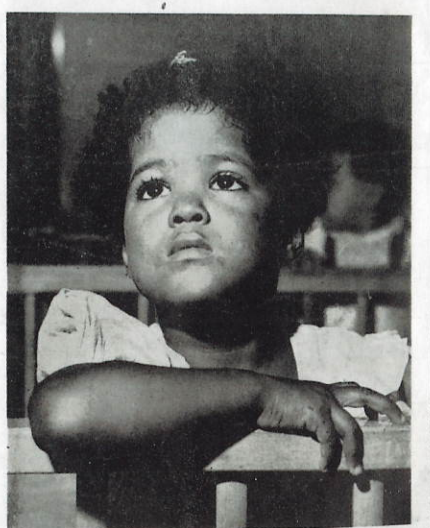
「ニッポン日記」 石崎津勇

「秘史朝鮮戦争」 西本裕

「J.M.バートラム 内乱から革命へ」 玉井五一



ニッポンの街



ニッポンの子供 (NHK放送局撮影)